

# 国語 (1)

解答番号

1

36

I

次の文章を読み、後の問い（問一～問十三）に答えよ。（50点）

渡辺京二著『逝きし世の面影』という本がある。幕末から明治初期に日本に来た外国人たちの膨大な日本見聞記を主な史料として、当時の日本の民衆の人情風俗を再現しようと試みた大著である。ここに描き出された江戸時代末期の日本の風俗習慣のなかには、これまで私たちが主に時代劇映画をつうじて知ったつもりでいたこととはいろいろ違っていることが多い。

たとえば参勤交代の大名行列である。時代劇映画ではよく、先頭に先導の下郎たちが立って、「下におろう！ 下におろう！」<sup>a</sup> といながら、イギを正した長い行列が街道を行く。道筋に居あわせた百姓町人などの一般民衆はその道の両端に坐って平伏して送る。ところがこの本の第七章「自由と身分」には次のような一節がある。

「……オイレンブルク使節団のベルクは **A** 大名行列への平伏について、たしかに先触れは『下にいる』と叫ぶが、実際の平伏シーンは一度も見なかったといっている。というのは民衆が行列を避けるからで、彼の見るところでは彼らは『この権力者をさほど気にしていないのが常』であり、『大部分の者は平然と仕事をしていた』。またスミス主教のいうところでは、尾張侯の行列が神奈川宿を通過するのに二時間かかったが、民衆が跪いたのは尾張侯本人とそれに続く四、五台の乗物に対してだけで、それが通り過ぎたあとでは『跪く必要から解除されたものとみなして、立ち上って残りの行列を見ていた』とのことである」

まあ参勤交代といっても長い時代にわたって行われてきたものだから、いつもこうだったかどうかは分からないし、証言も二人だけでは少なすぎて、大名行列なんて実際はその程度にしか対応されていなかったとはいいきれない。しかしもし本当に

映画のとおりのようなことをやっていたら、街道筋の人々はめんどうくさくてたまらなかったであろうし、適当にそんなふう  
にやっていたものだと考えるほうが現実味がわいてくる。

大名行列というのは外国人にとっては非常に珍しいものだったし、**ア** 本当に通行人が平伏するものなら、それこそ  
噂うわさに聞いていた東洋的専制、大名の絶対的な権力と民衆のそれに対する隷属状態の証拠と思われるので彼らはこれに注目し  
た。しかし実際にはそれほどのことではなかったと知り、わざわざ記録を残したわけだが、当時の一般民衆はいちいちそんな  
ことについて記録は残していない。**イ** 映画などでは想像で再現するよりしかたがないし、どう想像するのが正しいとも  
厳密にはいえない。ただ想像には必ず歪ゆがみが生じるはずであるし、その歪ゆがみがどういう方向を向きがちであるかということに  
は、<sup>1</sup>こうした史料が視野に入った場合には意識的になるほうがいいであろう。

一般にわれわれは、封建時代の身分関係は非常に厳格なものだったと考えやすい。制度的に見ればたしかにそうである。上  
位者の命令は絶対で、下位者はそれに服従しなければならぬのが封建社会であったはずである。**ウ** 現実には社会はそ  
れでは機能しない。封建社会はそれを、適当に融通を利かせるというかたちで処理していたはずであるが、その融通の利かせ  
方というのは公式の記録には残らないし、百姓町人などはそこの機微きびを日記や随筆に書き残すこともなかったであろう。

以前、歴史の教科書などではよく、百姓は収穫の半分以上も年貢にとられたと書いてあったものであるが、人口の八〇パー  
セントぐらいが農民だったとして、外国に輸出をしていたわけでもないのに、<sup>2</sup>残りの二〇パーセントの武士や町人がどうして  
収穫の半分以上もの米を消費できたのか不思議でならなかったものである。実際には名目上の収穫と実際のそれとが違ってい  
たりして融通を利かしていたのだろう。支配者と被支配者の間には名目上のことと実質とは半ば公然の違いがあったのだと思  
われる。大名行列をめぐる武士と百姓町人の関係もそうで、形式上は平伏することになっていても、実際は適当にやっていた  
にすぎないと考えると分かりやすい。

ただ、時代劇映画がだいたいそうであるように、適当にやっていたというふうには想像力は働きにくく、厳格に行われてい  
たというふうに出されやすい。それは文書による記録はそういうものしか残っていない、という理由もさることながら、

という思い込みがわれわれにはあるからではないか。

明治維新は封建社会を否定するために行われた。身分の固定化を否定して個人の能力をずっと自由に伸ばせるテンションの高い競争社会にするという意味ではそれは成功したが、民主主義にはほど遠いものであったのでそれは半封建制などと呼ばれ、第二次大戦の敗戦後にはその半封建制の否定ということが新たな目標になった。いずれの場合も原則として封建制は否定すべきものであった。戦後民主主義の政治思想にとっただけでなく、明治の体制にとっさえも封建制を打倒し得たということがクンシヨウであり、誇りであり、己れの正しさの証拠なのであった。そして自分が正しいと信じるためには自分が否定した過去は間違っていたという証明が必要だった。封建社会にはこんな悪い制度や習慣があった、といえばそれは事実と感ぜられ、しかし実際には融通を利かせてたいした弊害はなく、人々のはのんびり楽しく適当にやっていたのだ、などといわれても疑わしく思う。そんな心性が明治以後の日本人には積み重ねられてきていたと思われる。

どんな社会にも否定面はあったから、封建社会にも否定面はあったに違いないが、日本の江戸時代の封建制は、薩摩藩の琉球侵略と松前藩のアイヌ侵略を別として、対外戦争をせず、稀に見る平和で穏やかで非競争的な社会をつくりあげていたという面は忘れられがちであった。

『逝きし世の面影』には幕末から明治初期にかけて日本にやってきた外国人の日本見聞記の要所要所がびっしり詰め込まれるようにして引用されているが、こうして集大成された外国人の印象を集約するといくつかの共通点が浮かびあがる。

まず、当時の日本の民衆が一般に非常に幸福そうに見えた、ということである。生活は簡素であるが食うにこと欠くことなく、趣味もよく、仕事には誇りを持って楽しそうに働いており、礼儀正しく、ものおじせず、女が地方を旅したりしても危険も少なく、身分社会ではあるが下層の者が上層の人に対して卑屈であることもない。そもそも身分差による生活程度の差があまり大きくない。

これらの指摘はしばしば、本当かいな？ という疑いを起こさせる。しかし非常に多くの外国人が **B** に同じことを書き残しているのである。彼らは自分たちのよく知っている西洋の母国に較べてそう書いている。またわざわざ日本まで

やってきた彼らのなかにはアジアの他の国々での生活を経験している者も少なからずいて、アジアの他の国々に比較しても当時の日本にはそういうことがとくにはつきりいえる<sup>4</sup>と書いている。もし日本が他のアジアの国々に較べてもそういえるとしたら、たぶんそれは国民性というようないまぬ理由にもとづくものではなく、外国の侵略や支配をまぬがれ、久しく内戦もないという稀な状態のなかで、支配者と被支配者の間に互いに融通をつけあつてうまくやるという慣習が成熟したせいではないかと私は思う。

融通のつけかたの核心は、支配者が被支配者の自治をどこまで認めるかということであろう。どの藩でも支配者は大名であり武士であるが、実際には武士は農村にまでは入らず、村の自治にまかせている。一定の年貢を村の長老たちがとりまとめて藩に提出してくれさえすれば、<sup>5</sup>実際には収穫量をごまかしていてもあえて問題にはしない。

こういう合意は異民族支配の場合は支配階級と被支配階級の相互の不信感が強く、思いやりというクッション作用が機能せず、また互いに容易に残酷になりやすいために成り立ち<sup>にく</sup>難しい関係であるが、徳川三百年の平和はそれを可能にしたのかも<sup>し</sup>れない。

(佐藤忠男『映画の真実』による)

問一 文中の二重傍線部(a・b)のカタカナを漢字に直したとき、同じ漢字を用いるものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

a					b				
イギ					クンシヨウ				
1					2				
5	4	3	2	1	5	4	3	2	1
判定にイ存はない	所有権をイ譲する	業務をイ託する	イ敬の念を抱く	台風が猛イをふるう	新たな戦いの序シヨウ	永年の功勞を顕シヨウする	批評家から激シヨウされる	清酒発シヨウの地	無罪を立シヨウする

問二 文中の波線部i(大著)は、ここでは「すぐれた著作」という意味で使われている。これとは異なる意味の語として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

- ① 快著      ② 好著      ③ 貴著      ④ 名著      ⑤ 良著

問三 文中の空欄(A・ウ)を補うのに最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し

- 選んではならない。ア 4、イ 5、ウ 6
- ① そのくせ      ② 実は      ③ あるいは      ④ しかし
- ⑤ 同じく      ⑥ だから      ⑦ さらに      ⑧ もし

問四 文中の空欄(A・B)を補うのに最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

- |                      |                      |
|----------------------|----------------------|
| A                    | B                    |
| 7                    | 8                    |
| ① 頭が <sup>ず</sup> 高い | ① 大言壮語               |
| ② 誇り高い               | ② 異口同音               |
| ③ 計算高い               | ③ 天衣無縫               |
| ④ 悪名高い               | ④ 一気呵 <sup>か</sup> 成 |
| ⑤ 敷居が高い              | ⑤ 一意専心               |

問五 文中の波線部 (ii・iv) のここでの意味として最も適当なものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

ii  
機微

9

- ① 表立ってはわかりにくい、細やかな事情や趣。
- ② 重要性が認識されておらず、過小評価されている物事。
- ③ 誰もが知っているが、表面的にはないものとして扱われる事柄。
- ④ 明確には示されない、言外に表れる意味合い。
- ⑤ 普段は意識されることもない、取るに足らない出来事。

iv  
心性

10

- ① 特有の文化
- ② 生まれつきの性質
- ③ 精神のありよう
- ④ 物事の発想の基盤
- ⑤ 善悪を判断する心の働き

問六 文中の波線部 iii (弊害) の対義語として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

- ① 代償
- ② 利得
- ③ 余慶
- ④ 温情
- ⑤ 恩恵

11

問七 文中の傍線部1(こうした史料が視野に入った場合には意識的になるほうがいい)とあるが、なぜ「意識的になるほうがいい」のか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

12

① 昔の日本がどのようなものであったかについて、さまざまな史料を使って復元しようとしても、過ぎ去った過去を正確に把握することなど不可能であり、そのような努力は無駄であることを教えてくれるから。

② 外国人が記して国外で密かに保管していた史料から当時の日本の本当の姿を知ること、日本で公的に残されてきた史料が、いかに権力者によって都合よく書き換えられたものであるかを実感することができるから。

③ それまで当たり前のように受け入れられてきた定説であっても、たったひとつの史料の発見によって、いとも簡単に新しい説に取って代わられるということを、肝に銘じることができから。

④ これまでの認識とは異なる姿を記した史料に触れることで、疑いもなく真実として受け取ってきたことが、先入観によって形作られてきた、現実とは異なる姿であるという可能性に気づくことができるから。

⑤ 人は自分の理想に合わせて現実を捻じ曲げるものであり、西欧で教育を受けた上で幕末の日本を訪れた外国人が記録したものであっても、それが客観性のある史料たりえているかどうかには検証が必要だから。

問八 文中の傍線部2（実際には名目上の収穫と実際のそれとが違っていたりして融通を利かしていたのだろう）とあるが、それは具体的にはどういうことか。最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

13

① 名目上の収穫高は実際の収穫高よりも高く設定されており、名目上の収穫高に応じて多くの年貢を納めなければならなかったということ。

② 実際の収穫高が名目上の収穫高よりも少ない場合には、武士がそれまでの備蓄米を抛出するなどして、年貢の不足分を補っていたということ。

③ 当時は実際の収穫高を正確に測る手立てはなかったので、幕府が定めた名目上の収穫高に応じた年貢しか課することができなかったということ。

④ 財政基盤が強固であると見せかけるために収穫高が多いうように記録していただけで、実際にはそれほど多くの年貢は納められていなかったということ。

⑤ 実際には名目上の収穫高よりも多くの収穫高があったが、表向きの収穫高に応じた少ない年貢を納めるだけで済んでいたということ。

問九 文中の空欄（X）を補うのに最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

14

① 時代劇映画には真実の姿が描かれているものである

② 封建社会がそんなに気楽なものだったはずはない

③ 日本人は社会的ルールをきちんと守る民族である

④ 百姓町人以上に生真面目な性格の人々などいない

⑤ 民主主義体制よりも幸福な社会など存在するはずがない

問十 文中の傍線部3（これらの指摘はしばしば、本当かいな？ という疑いを起こさせる）とあるが、なぜそのような疑いが生じるのか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

15

- ① 日本に短期間<sup>とど</sup>留まったに過ぎない外国人が見聞したことを、当時の本<sup>と</sup>当の姿を記したものと認めてもよいのかどうかという疑念が消えないから。
- ② 封建体制下における来日外国人の旅行は厳密な監視下に置かれており、当時、外国人が目にした日本人の姿は、外国へのプロパガンダのために作られたものであったから。
- ③ 封建制を否定することで近現代社会を築いてきた日本人にとって、当時の民衆が幸福そうに見えたという外国人の証言は、信じてきたことを根本から揺るがすものであるから。
- ④ 幕末に日本を訪れた外国人による記録は、大名や武士といった権力者によって検閲を受けていた可能性が高く、そこに記録されていることは改ざんされたものである可能性が高いから。
- ⑤ 外国人による日本見聞記は当時の外国人が自国の言葉で書き記した記録であり、微妙なニュアンスまで正確に日本語に訳すことができているのかどうかわからないから。

問十一 文中の傍線部4（たぶんそれは国民性というようなあいまいな理由にもとづくものではなく）とあるが、筆者はなぜそういうのか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

16

- ① 日本を訪れた外国人によって指摘された日本の民衆のありようは、日本人の固有の性質によるものではなく、歴史的な条件が整ったことによってもたらされた」と筆者は考えているから。
- ② 国民性は近代社会の発達に伴って成立したものであり、幕末の日本のように、それぞれの藩に大名が君臨しているような社会においては成立するはずもない」と筆者は考えているから。
- ③ 日本を訪れた外国人は日本人の特性を明確に指摘したが、それを国民性という、何にでも適用できる概念で説明してしまつては、文化論としても足りない」と筆者は考えているから。
- ④ 長く鎖国状態であった日本に対して、アジアの国々は早くから西欧に開かれており、国民性が両者で異なるというのは当然のことであると筆者は考えているから。
- ⑤ 日本人は自国の文化の特異性を強調する傾向があるが、そもそも国民性というものがある国は少数で、そこに理由を求めること自体がナンセンスであると筆者は考えているから。

問十二 文中の傍線部5（実際には収穫量をごまかしていてもあえて問題にはしない）とあるが、なぜ問題にしないのか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

17

- ① 武士として日々鍛錬を重ねていた支配者たちは、収穫高の計算といった実生活の細部に関わることについては無頓着で、被支配者が自分たちに都合よく収穫量を改ざんしても見抜くことができなかったから。
- ② 支配者と被支配者の生活空間は厳密に分けられていたため、支配者は実際の収穫量を知る手立てがなかったし、そこにあえて踏み込むことは、武士としての面目を失ってしまうことだったから。
- ③ 支配者と被支配者の間には、いわば共犯関係が成立しており、被支配者がごまかすことによって得た利益の一部は直接の支配者に上納されるという、お互いに損をしない仕組みになっていたから。
- ④ 支配者にとっては武士や町人の消費に足るだけの年貢が納められるということが重要であり、その範囲内でなされることであれば、被支配者側にある程度の裁量を認めておく方が支配が容易になったから。
- ⑤ 被支配者といっても村の長老は強大な権力を持っており、支配者である武士たちも、日ごろは彼らに便宜をはかっておくことで、いざという時に役に立ってもらおうという協力関係が形成されていたから。

問十三 本文の内容と合致しないものを二つ、次の選択肢の中から選べ。ただし、解答の順序は問わない。

18

19

① 幕末から明治にかけて日本を訪れた外国人が残した見聞記には信ぴょう性の低いものも混ざっているため、そこに書かれている内容については十分な吟味が必要である。

② 江戸時代の一般民衆は大名行列がすべて行き過ぎるまで平伏し続けていたと考えられていたが、外国人が記した見聞記には、それとは異なる姿が描かれている。

③ 外国人にとって大名行列は、東洋的専制の内実を示すものとして、非常に興味をひかれるものであった。

④ 『逝きし世の面影』では、日本を訪問した外国人によって記された見聞記が扱われているが、そこからは幸福そうに生活をする一般民衆の姿が浮かび上がってくる。

⑤ 幕末の日本にやってきた外国人は、日本の一般民衆は厳密な身分制のもと、苛烈な生活を強いられているのだろうと考えていた。

⑥ 第二次大戦の敗戦後は、明治維新以降の半封建制の否定が新たな目標となったため、封建時代の個人を重んじた競争社会のよい面が見直されるようになってきた。

⑦ 江戸時代の日本社会の特異性に関して、筆者は三百年に及ぶ平和な世の中であったということが要因のひとつであると考えている。

## II

次の文章は、今井むつみ『学びとは何か』の一節である。文中の「スキーマ」とは、人間の記憶中に蓄えられた知識の構造のことである。これを読み、後の問い（問一～問十一）に答えよ。（50点）

外国語を学ぶときに母国語のスキーマを克服することがどのくらい難しいか。筆者は日本人と韓国人で中国語を学ぶ学習者が、中国語で同じような意味を持つ複数の語をどのくらい中国語母国語話者に近く使い分けができていたのかを調べた。題材は、英語では「hold」という動詞で表される、「モノを手、あるいは体のどこかで支えて保持する」一連の動作を表す中国語の動詞群である。

中国語では、英語ならばすべて「hold」として区別されずに表す動作を、どのような手の形で持つか、体のどの部位で支えるかによって、二〇以上の動詞で区別する。日本語は中国語ほどは細かくないが、英語よりは細かく「持つ」「背負う」<sup>a</sup>「カック」<sup>b</sup>「抱える」などの動詞で区別する。

日本語を母国語とする学習者がどの程度これらの動詞群（代表的な一三の動詞）を使い分けられるのかを調べた。三年以上中国語を学習し、一年以上中国に<sup>b</sup>タイザイして日常生活に不自由しないほど中国語を話せる学習者でも、動詞の使い分けのレベルは中国語を母国語とする五、六歳の子どものレベルで留まっていた<sup>と</sup>。その後、学習期間が長くなっても使い分けのレベルは向上しなかった。日本人学習者は、日本語で「持つ」とは区別する動作に対しては正しく中国語動詞を使うことができたが、日本語で区別しない一連の動作に対しては、「拿（ナ）」という「持つ」に意味が近く最も幅広く使われる動詞を過剰に用いていた。中国語の母国語話者がする使い分けをほとんどしていなかったのである。

何か新しいことを学習するときに、人は必ず、すでに持っている知識を使う。自分がそのような知識を持っているということに気づかずに無意識に使っている場合も多い。多くの「スキーマ」はそのような知識だ。

「スキーマ」は情報を取り込み、記憶するために重要な働きをする。人は、大人も子どもも、スキーマに導かれて今起こっている出来事、あるいは学習すべき文章や映像などの行間を自分で埋めて理解する。人は理解できない情報をそのまま記憶に

取り込むことは非常に苦手だ。したがって、スキーマに関連して容易に理解された情報のみが記憶され、スキーマに合わない情報は記憶されることがあまりない。スキーマは情報の取捨選択も行う。スキーマに合った情報は注意しやすく、記憶されやすい。スキーマに合わない情報には注意が向けられず、したがって記憶もされない。

スキーマが誤ったものであると、何が起こるか。問題解決に必要な情報に目が行かず、関係ない情報にばかり注目してしまう。スキーマに合うように情報（あるいは学習すべきテキストの内容）を理解してしまい、それを記憶してしまう。その結果、誤った思い込み知識（誤認識）は、修正されるどころか、強化されてしまう。そういうことが繰り返されるので、誤ったスキーマの修正は難しいのである。

<sup>2</sup> 科学者でさえも、データから自分の仮説を疑うことは容易ではない。人は自分の信念と一致する現象に注目し、一致しない現象は無視しがちである。これを「確認バイアス」という。科学者も人である以上、確認バイアスを持つことは自然なことである。自分の仮説と一致するデータにはすぐに注目することができる一方、仮説と一致しない、あるいは矛盾するデータは見落としてしまうか、「実験の手続きのちょっとした間違い」と思ってしまうがちなのである。

子どもが小さいころから自分で世界を観察し、自分でつくりあげたスキーマを捨てて「**A**」を受け入れることは、科学者が**B**を捨てて**C**にたどり着く過程と似ている。子どもがもともと天動説を信じていて、大人から「地動説が正しい」と言われても簡単に天動説を捨てられないのは、コペルニクスや一六世紀の人々が、それまで「正しい理論」だった天動説を捨てられなかったのと同じなのだ。言い換えれば、自分で培ってきたスキーマ、つまり「誤った思い込み理論」を捨て、大人から教えられる「正しい理論」、正確に言えば現時点では科学者によって「正しい」と考えられている理論を受け入れることは、子どもにとってコペルニクスの転換を迫られる**X**な出来事なのである。

**A**、最初から誤ったスキーマをつくらなければよい、正しいスキーマを最初からつくれるように教育すればよいではないか、と読者は思われるだろう。しかし、それはできないのだ。<sup>3</sup> スキーマは、人の自然な世界の認識のしかたを反映して自分でつくるものであるので、それをことばで直接教えることはできないからだ。それをつくらないようにすることもできない

し、「**Y**」に正しいスキーマ」を子どもに直接教えることもできない。

母国語に関するスキーマは、母国語に潜む様々なパターンを子どもが自分で発見してつくりだすもので、母国語を学習するために絶対に必要なものだ。

**イ**

、母国語についてのスキーマをつくらないようにすることはできない。外国語のスキーマ

マを子どもに教えることもできない。

**ウ**

、言語に関するスキーマは、そういう知識をもっていることさえ、普通の人は

気がついていないのである。

両親のそれぞれが別の言語を母国語とし、常にそれぞれの母国語で子どもに話しかけるといふバイリンガル環境にある場合には、子どもは二つの言語のスキーマを同時に学習することができる。

**エ**

、母国語と外国語の学習の時期に時間差がある場合、母国語の学習を促進するためにつくったスキーマが外国語の学習のときに無意識に働くことがある。それを妨げるこ

とは困難である。(だからといって、上記のような環境にないのに、外国語の学習を誕生時から始めても、外国語を自分で使う必要がある時間が短い場合には、外国語学習のためのスキーマを子どもが自分でつくることは困難である。したがって、むやみに早く外国語学習を始めても、この問題を解決できるわけではない。)

人が科学や外国語を学び、熟達していく上で大事なことは、誤ったスキーマをつくらないことではなく、誤った知識を修正し、それとともにスキーマを修正していくことだ。

<sup>4</sup>

「学ぶ」ということは、あることに熟達し、達人の道を行っていくことである。その道を行っていく上で、スキーマをつ

ることは欠かせない。たとえ誤っていても、知識のシステムを素早く立ち上げるためにスキーマをつくる。しかし、スキーマが誤っている場合には、その誤ったスキーマを乗り越え、新たなスキーマをつくり直す過程を踏まなければならぬ。

では、どのようなときにそれが可能になるのか。自分で自分の理論と矛盾する現象を経験して、自分の思い込み理論がおかしいことを納得できたときである。そのためには、まず、現象が自分の理論と矛盾することに気がつかなければならぬ。ただし、これはさきほど述べたように、科学者にとっても容易なことではない。

(今井むつみ『学びとは何か——〈探究人〉になるために』による)

問一 文中の二重傍線部 (a・b) のカタカナを漢字に直したとき、同じ漢字を用いるものを、次のそれぞれの選択肢の中から選べ。

- |              |             |              |              |            |  |  |  |  |  |
|--------------|-------------|--------------|--------------|------------|--|--|--|--|--|
|              |             | a            |              |            |  |  |  |  |  |
|              |             | カツグ          |              |            |  |  |  |  |  |
|              |             | 20           | }            |            |  |  |  |  |  |
| ⑤            | ④           | ③            | ②            | ①          |  |  |  |  |  |
| 会長に推キヨする     | プロとしての自フがある | 悪事に加タンする     | 宅配業者に集力を依頼する | 抑ヨウをつけて話す  |  |  |  |  |  |
|              |             |              |              | b          |  |  |  |  |  |
|              |             | タイザイ         |              |            |  |  |  |  |  |
|              |             | 21           | }            |            |  |  |  |  |  |
| ⑤            | ④           | ③            | ②            | ①          |  |  |  |  |  |
| 沈タイムードを吹き飛ばす | 速読でタイ意を理解する | 従業員に制服をタイ与する | ゴリラの生タイを観察する | タイ憎な生活を改める |  |  |  |  |  |

問二 文中の波線部 i (矛盾) は故事成語であるが、語としては「矛と盾」という構成をとっている。次の故事成語のうち、同じ語構成となっているものを選べ。

- ① 守株 しゆしゆ      ② 助長      ③ 蛇足      ④ 杞憂 きゆう      ⑤ 推敲 すいこう

問三 文中の波線部 ii (踏まなければ) とあるが、これと同じ意味で「踏む」を用いた例として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

- ① 車のブレーキを踏む      ② 正しい手順を踏む      ③ 晴れの舞台を踏む
- ④ 故郷の地を踏む      ⑤ 実現は難しいと踏む

問四 文中の空欄（A～C）を補うのに最も適当な組み合わせを、次の選択肢の中から選べ。

24

- ① A 新しい理論 | B 正しい仮説 | C 自分の概念
- ② A 正しい仮説 | B 正しい理論 | C 新しい仮説
- ③ A 自分の仮説 | B 新しい概念 | C 正しい理論
- ④ A 正しい概念 | B 自分の仮説 | C 新しい理論
- ⑤ A 新しい概念 | B 新しい理論 | C 自分の仮説
- ⑥ A 自分の理論 | B 新しい仮説 | C 正しい概念

問五 文中の空欄（X・Y）を補うのに最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し

選んではならない。X 25、Y 26

- ① 心理的
- ② 空想的
- ③ 独創的
- ④ 科学的
- ⑤ 革命的
- ⑥ 危機的
- ⑦ 現実的

問六 文中の空欄（ア～エ）を補うのに最も適当なものを、それぞれ次の選択肢の中から選べ。ただし、同じものを繰り返し

選んではならない。ア 27、イ 28、ウ 29、エ 30

- ① そもそも
- ② もちろん
- ③ したがって
- ④ とりあえず
- ⑤ かし
- ⑥ それならば
- ⑦ ところで
- ⑧ あるいは

問七 文中の傍線部1(中国語の母国語話者がする使い分けをほとんどしていなかった)とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

31

- ① 日本語の場合でも、一語にたくさんの意味が備わっており、使い分けようとするれば使い分けられるが、本来的にどうしても使い分けなければならないものではないから。
- ② 中国語は、母国語である日本語とは異なる使い分けが必要なのに、身に付いた母国語の発想から抜け出せず、日本語に対応する言葉に置き換えることしかできないから。
- ③ 言語の使用状況について調査されると、非母国語話者は間違えてはいけなないと考え、ことさらに規範を意識して辞書的に正しい言葉だけを選択して答えようとしてしまうから。
- ④ 普段漢字のみを使う中国語の母国語話者は、漢字の数だけ使い分けをしようと努める傾向があるが、かなも使用する日本語の母国語話者はそこまで使い分けをすることはないから。
- ⑤ 中国語の動詞の使い分けは、中国語を三年以上学習した日本語の母国語話者にとってはそれほど難しいものではないが、多くの学習者はそこまで長期にわたって学ぶことがないから。

問八 文中の傍線部2（科学者でさえも、データから自分の仮説を疑うことは容易ではない）とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

32

① データは外界を理解する認識の枠組みを構成する重要なものなので、それに疑念が生じた場合、一般の人が取り組む程度の課題にはさほど影響がないが、長い過程を経て真理にたどり着こうとしている科学者の扱う問題においては、深刻な影響が出てしまうことになるから。

② 人は最初に触れたデータによって自分のスキーマを作り上げるものであり、その後新しいデータを得てもなかなかスキーマを更新することができないが、常に客観的にデータと向き合っている科学者であってもこの点に関しては少しも変わることがないから。

③ 一度でもデータに誤りがあることを認めてしまうと、自分の研究に対する信頼度が著しく損なわれてしまうこととなるため、客観性をことさらに重要視する科学者たちほど、自説を構築するために使用したデータを否定することに強い忌避感を持つから。

④ 論理的で客観的な思考に長けて<sup>た</sup>いるはずの科学者であっても、いったん仮説を立てると、それに物の見方が束縛されてしまい、得られたデータのうちの自説に都合の悪いところに対しては気づかなかつたり、データ自体に誤りがあると考えたりしてしまうから。

⑤ スキーマを構成しているデータは、スキーマが出来上がってしまったえば必要がなくなつて意識に上ることがなくなるため、データの取り扱いに不慣れな一般の人はもちろん、取り扱いに習熟した科学者であっても、データに基づいて再検証することはできないから。

問九 文中の傍線部**3**（それはできないのだ）とあるが、なぜできないと筆者は考えているか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

33

- ① 人間は基本的に自分が正しいと信じていることしか耳に入らない生き物であり、たとえ信頼している相手からであっても、簡単にスキーマを受け取ることはないから。
- ② 誤ったスキーマを作らないようにすることは理論上は可能であるが、実際には人それぞれの思い込みによって誤りが入り込むことになってしまうから。
- ③ スキーマとは、人が世界と接する中で自発的に作り上げていくものであり、正しいスキーマに達することができる道筋を学び取らせることはできないから。
- ④ 複雑に構成されているこの世界を本当の意味で理解できるような、真に客観性を備えたスキーマは存在しないので、本来的に他者と共有することはできないから。
- ⑤ スキーマは自分自身の経験によってはじめて構築されるものであり、他者から受け取るためには他者の経験に深く入り込む必要があるが、それは容易にはできないから。

問十 文中の傍線部4〔「学ぶ」ということは、あることに熟達し、達人の道を歩んでいくことである〕とあるが、「学ぶ」として、筆者は何か大切だと考えているか。その説明として最も適当なものを、次の選択肢の中から選べ。

34

- ① 一つの分野だけでなく様々な分野の現象に向き合っていてできる限り知識を増やし、蓄えた知識によってスキーマを常に最新のものに更新して、より良いものにしていくこと。
- ② 自分が作り上げたスキーマが誤っていたとしても、構わず利用し、試行錯誤を繰り返しながら間違った箇所を見つけて出し、微修正を加えながら考察を続けていくこと。
- ③ ある分野が重要だと思ったら、まずはその分野の現象を正確に観察して精緻なスキーマを作り上げ、専門性を十分に高めた上で別の分野に応用しつつ学びを深めていくこと。
- ④ スキーマという知識の枠組みが決して万能ではないことを十分に認識し、可能な限り多くの現象を確認して、誤ったスキーマを自分の中で構築しないように努めること。
- ⑤ 自分が作り上げたスキーマと現象との乖離かいりを経験したならば、スキーマの方に誤りがある可能性を認め、その都度スキーマを作り直す姿勢を保ち続けるということ。

問十一 本文の内容に合致するものを二つ、次の選択肢の中から選べ。ただし、解答の順序は問わない。

35

36

① 外界を認識するのに欠かせないスキーマは、たとえ誤ったものであっても利用価値があり、何種類も備えておく方がよい。

② 母国語の学習のために作り上げたスキーマは、母国語の学習の際に機能するもので、外国語の学習には影響しない。

③ 日本語を母国語とする話者であれば、英語の「hold」に相当する中国語の動詞の使い分けのレベルは、中国語を学んだ期間の長短に比例する。

④ 人は誰しも、目の前の出来事や学習すべき対象についての自分では理解できない部分を、スキーマを使って理解できるようになっている。

⑤ 天動説を唱えたコペルニクスのような特別な人だけが、スキーマを作り出すことなく、スキーマから完全に自由であることができる。

⑥ 誤ったスキーマを修正するには、まず現象を自分では到底理解できないことを正直に認め、自分の思い込みに誤りがあることを了解する必要がある。

⑦ 人はスキーマによって情報を整理するので、スキーマに合わない情報については、記憶に残すことが不得手である。